

『秋色』

著:朝丘 戻

ill:小椋ムク

神さまの器(うつわ)だ。

左横に座っているマリ子ちゃんのお腹が丸々と膨らんでいるのを見つめていてそう思った。女性の身体は神さまの器だ。

「それにしてもマリ子は美人になったなあ……」

俺の正面に座っているアキがビールを呑みながらしみじみ感嘆する。

「いやだアキ先生。わたしは人妻ですからね、口説かれても困りますからね」

「安心しな、そんなことしないから」

「どうだか。わたしアキ先生は手がはやくて節操なしって印象強いからな—ああ怖い」

「たとえ手がはやくて節操なしでも相手ぐらい選びます」

「なっ、それどういう意味よっ」

がたっと椅子を立ったマリ子ちゃんがアキの頬をつねる。

「いたた。こら離せ、じゃじゃ馬」

「痛がるといういわ！」

週末の居酒屋の店内が賑(にぎ)やかだからといって、はしゃぎすぎるのはよくない。

マリ子ちゃんもアキも口喧嘩しているわりにとっても楽しそうに笑ってじゃれ合っているから、俺はやれやれと息をついて二人を宥(なだ)めた。

「落ち着きなよ、もう—……」

まともに会話を交わすのが初めての二人とは思えない。

この面(メン)子(ツ)で会うのは、五年前にうちの玄関先で数分話をした日以来二度目だ。またいつか三人で会いたいね、とアキと何気なく交わしていた約束が実現したのだ。

たぶん俺とアキの社交辞令じみた口約束だけだったなら、徐々に風化していったと思う。

マリ子ちゃんに『アキのお絵描き教室の展示会に行って、久々にアキと会ったよ』と打ち明けて、その後彼女が『みんなで会おうよ、時間あけるから！』と積極的に動いてくれたから今夜に繋(つな)がった。

「マリ子ちゃん妊婦なんだから、暴れないで座って」

「ちょっと美里君、病人扱いしないでよ」

「身体は大事にしないと駄目でしょうが」

「美里君は神経質すぎっ、うちの親みたい！」

……心配しているのに非難されるなんて理不尽だ。

大きなお腹を庇(かば)いつつ椅子に座りなおすマリ子ちゃんを俺も横から支えて手伝っていると、

「美里はそんなに世話焼きだったっけ」

とアキに訊かれた。箸で魚を突きながら薄く微笑しているアキに、苦笑して返す。

「妊婦の身体は気づかうよ」

「ふうん……？」

マリ子ちゃんがすかさず、

「あ、今アキ先生は妬いたよ」

とにんまりして俺に擦(す)り寄ってきた。

「アキ先生は前もわたしに妬いたもんねー？」

ひひひ、とからかって笑うマリ子ちゃんに戸惑ってしまう。前も、って、五年も昔の出来事をそんな最近っぽく表現されると違和感だ。

「アキの方が面倒見がいいよね。お絵描き教室の先生だから」

ポテのチーズ焼きに箸(はし)をのばして話題を戻した。

「えー？ 美里君、家庭教師してもらってた時に散々いじめられたじゃん」

「アキは厳しいだけだから」

「はあ？ 『男相手なら妊娠しないし都合いい』って暴言吐いたような人があ？」

がくりと項(うな)垂(だ)れるようにしてアキが頭を垂れる。

「……今のマリ子にその言葉で責められると心苦しい。すみません、若かったんです」

マリ子ちゃんは「苦しゅうない、面(おもて)を上げよ」とまたにやにやしてからかった。

確かにあの言葉は酷かったけど、その通りだしなと俺は思ってしまう。子どもも結婚もできない同性であることは浮気とも認識できず、無意識のうちに俺たちの免(めん)罪(ざい)符(ふ)になっていた。

それにアキは物言いがストレートなだけで、常識的で嘘をつかない優しい人だ。優しいから俺の“抱いてほしい”という願いを叶えてくれていたんだし、恋心に気づいても理解しようとしてくれた。嫌というほど知っている。

過去の記憶が蘇ると、店内に反響する他人の笑い声やグラスや皿の立てる音が遠くなった。

「美里、腹でも痛いのか」

ふいに呼ばれて顔を上げると、アキが心配そうな表情でこちらを見ている。俺は目の前にアキがいるのをなんだか不思議に思いつつ、「ううん」と頭を振った。

「ねえねえ、二人って再会してから何回ぐらい会ってたの？」

ウーロン茶を飲んだマリ子ちゃんの問いに、

「三回かな。俺が美里の絵を描かせてもらってるから」

とアキがお刺身を食べながらこたえてくれる。

「三回？ たったの？ 再会したのってもう何ヶ月も前じゃなかった？」

「お互い忙(いそが)しいしな」

「うわーアキ先生のくせに遠慮(えんりょ)がちなセリフ。今から来い、って電話して一方的に切ったりしそうなのに」

「……そのイメージなんとかならないのかよ。おまえとももっと深く付き合う必要がありそうだよな、つとに」

「あ、やっぱり口説いてきた」

「ないから」

「即答されるとそれもむかつくー」とマリ子ちゃんがむくれて、アキも「どうしたいんだよおまえは」と呆れた。

「ていうか、今アキ先生に彼女がいるって本当？」

続くマリ子ちゃんの質問に、アキは一瞬だけ俺を見(み)遣(や)って“言ったのか”とい

うふうに苦笑を洩らす。

ごめん、と俺が謝罪するより先に、

「別れました」

とアキがこたえた。

「だよ、なんかそんな気がしてた」

マリ子ちゃんはずんわり納得してしまう。

え、と言葉を失って動揺しているのは俺だけのようだった。

「彼女とはもともと恋愛って感じじゃなかったからな。高校の同窓会で会って、昔好きだったのよって言われて、なあなあに続いてただけっていうか」

「何年ぐらい？」

「三ヶ月程度だよ」

「ふうーん。ありがちな始まりだったんだね」

「俺は最初に“好きになれないと思う”って言ってたしな」

「美里君がまだ好きだからって？」

目を細めてマリ子ちゃんを見るアキが、苦々しく笑って煮物の人(にん)参(じん)を口に入れる。左側の頬に入れてゆっくりとしっかり咀嚼(そ)嚼(しゃく)して喉に通すと、ビールを呑む。

騒がしい店内の片隅で、俺たちのテーブルだけ沈黙が流れた。

「ねえ、あのさ、不(ぶ)躰(しつけ)だってわかってるけど——……二人はこれでいいの？」

マリ子ちゃんの声が躊躇(ためら)いがちに洩れた。

「わたしは二人を見てきたんだよ。アキ先生と会った回数は少ないけど美里君から色々聞いてきた。別れたあと美里君が沈んでたのを励(はげ)ましてもきたんだから。……難しい恋愛だっていうのは苦しいぐらい伝わってくるよ。親にも理解してもらって、わたしでさえ旦那の親に挨拶に行く時緊張したからその何倍も大変なんだろうって想像つく。でも本当によかったの？」

マリ子、とアキが制してもマリ子ちゃんは無視した。

「わたしは二人が好きなお人と結ばれてくれればいいよ。二人を大事な友だちだと思ってるから、ちゃんと幸せになってほしいの。アキ先生は今誰が好きなの？ 幸せなの？ ねえ美里君は？ シーナ君って最初から強引だったじゃない、本当に好き？ 絆(ほど)されただけじゃない？ 同情しただけじゃ、」

「——マリ子、やめろ」

アキの声に鈍い怒気が含まれていた。

「美里を責めるのはやめろ」

俺は視線を下げたまま息を詰めていた。なにも見ていなかった。アキがどんな顔をしているのか想像していた。昔幾度も目のあたりにした俺を叱る時のアキの厳しい優しさを思い返して、その記憶の中のアキを凝視していた。やがてだんだん意識が現実に戻ってくると、正面にいるアキの右手の、薬指の指輪がそこにあった。

「アキ先生の、ばか……っ」

マリ子ちゃんの泣きそうな憎まれ口が三人だけのテーブル席に重苦しく響いて、居酒屋の雑音の中に紛れて消えた。

本文 p59～65 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>